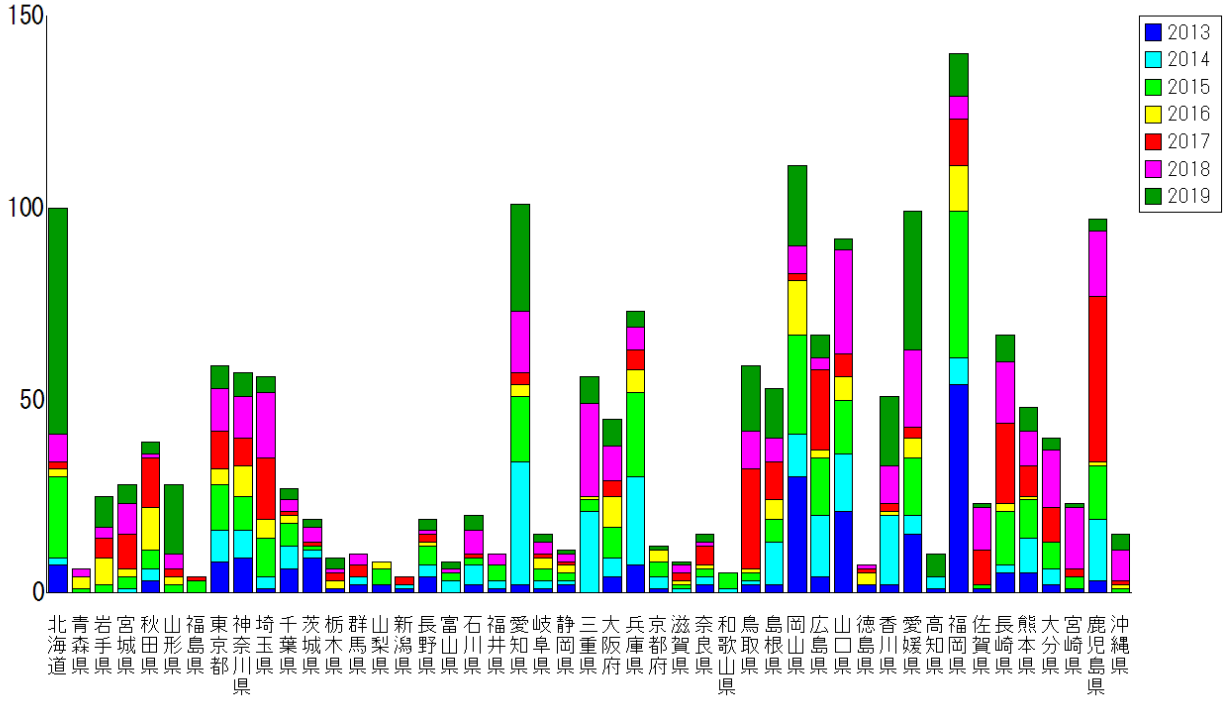
２０２０年
（令和２年）
冬季号

自見はなこ議連事務局長が大臣政務官に就任

北海道会員倍増活動

実態調査アンケートの意義

CLINICAL ENGINEER UNION NEWS



事務局報告

あけましておめでとうございます。令和2年を迎え、会員の皆様におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また、平素は当会活動に多大なるご尽力を賜り、厚く御礼申し上げます。日本臨床工学技士連盟は全国の皆様のご協力によって、昨年末で会員数約1900名の会へと成長することができました。ですが、まだまだその力は決して強いとは言えません。皆様が常日頃の業務の中で抱えている要望が一つでも多く国へ届けられるように、今後の発展のために更なるご協力をお願いいたします。当会に関してご不明な点がございましたら、事務局までご連絡をお願いいたします。（事務局一同）

事務局
〒113-0034　東京都文京区湯島1丁目3-4KTお茶の水聖橋ビル5F　（日本臨床工学技士会）
Tel: 03-5805-2563　Fax: 03-5805-2597
Email: info@ce-renmei.gr.jp

迎春

新年あけましておめでとうございます。謹んで新年のお慶びを申し上げます。２０１９年に沢山の感動を与えてくれたラグビー日本チームの合言葉は「ONETEAM」。昨年の流行語大賞となりました。“勝つ！”というたった一つの目標に、一人の個人ではなく団体で一致団結し、いかなる試練にも耐え忍んで乗り越え、目標を達成する姿に多くの人々が感動しました。島国根性とは、他国と交流の少ない島国に住む国民にありがちな、視野が狭く閉鎖的でこせこせした性質や考え方。とデジタル大辞泉では訳されていますが、一方で日本人独特のお互いを思いやり助け合う精神を育んできた歴史があります。少ない資源を大切にし、奪い合うのではなく分け合うと言った考え方が、人一倍の緻密さや丁寧さ、きめ細かい気配りや忖度（悪い意味ではない）と言った文化が形成されたのだと思います。人やモノやサービスや情報が、目まぐるしく行き交うグローバルな社会となっても日本人が諸外国に誇れる文化は、いつまでも継承されることを願っています。勘が鋭い人はこのくだりから、「ひとりじゃできないをみんなでできるに」とスローガンを掲げた、連盟活動につなげる意図を察しられたことでしょう。繰り返し申し上げているとおり、臨床工学技士を守り育てることは一人では実現不可能です。より多くの協力と一致団結、即ち「ONETEAM」で無いと目標は達成できません。昨年で創設より５年を経過し一つの節目を迎えました。今年度より第2期として新たな役員編成を整備し、さらなる前進を目指して活動を行ってまいります。おかげさまで昨年末時点において、1890名の方から温かいご支援を頂ける会として成長することが出来ました。本当に心より感謝申し上げます。さて、渦中の医師の働き方改革を進めるためのタスクシフトは、まさに大詰めを迎えています。結果的に昨年度中予定の取りまとめは年越しとなり、今年の通常国会への提出は見送られる見込みです。特に“法改正に必要な３要件で整理”というフレーズに着目して閲覧頂くと審議の中身が理解しやすくなります。この臨床工学技士にとっても歴史的な変革期のタイミングに、連盟が存在していたこと、連盟が渦中の案件に関わることができたこと、さらにその案件の力となることができたこと、実にありがたいことだと思います。そして、その力は会員一人一人のお力であることを強調させていただきます。まだ目に見えた結果はご提示することはできませんが、私自身大きな期待を寄せていますし、皆様方もせひあたたかい目で見守って下さい。

鼠年の2020年、東京オリンピックの開催の本年が、皆様にとって夢と希望にあふれる健やかな年となりますよう心より祈念します。本年もどうぞよろしくお願い致します。（肥田理事長）

HELLO 2020

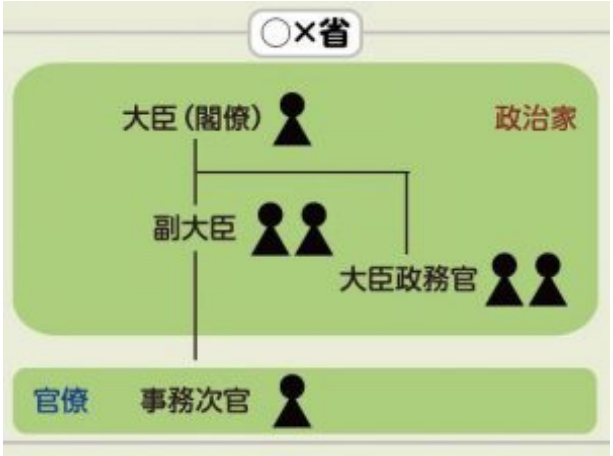
新年あけましておめでとうございます。本年も何卒宜しくお願い申し上げます。透析療法に従事する臨床工学技士にとって2020年の元旦は水曜日であり、平日と変わらない勤務体制の中でお正月を過ごした方も多いのではないでしょうか。2020年の干支は「子」です。十二支とはそもそも植物の循環の様子を表しており、子は本来、「孳」という字で”種子の中に新しい生命がきざし始める状態”を指し、新しい運気のサイクルの始まりを表すそうです。ねずみは多産で強い繁殖力と生命力があることから「子孫繁栄」の象徴として、また古来より五穀豊穣の神である大黒天の遣いとされ、豊かな実りや財力の象徴ともされてきたそうです。今年は何か新しいことにチャレンジするのに適した年となりそうですね。「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方をいう」私の好きな言葉ですが、年齢に関係なくこれから先も成長し続ける意識を持った生き方をしていたいものです。東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年、全国の臨床工学技士がアスリートに負けないようなチャレンジとさらなるご活躍を心から願っております。（社会医療法人緑泉会　米盛病院　中原三佐誉）

自見はなこ議連事務局長が大臣政務官に就任

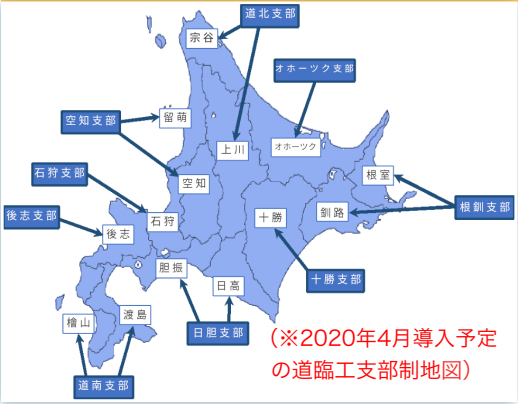
９月に行われた第4次安倍内閣改造で、我々ＣＥ資質向上議連、幹事長の橋本岳議員が厚生労働副大臣に事務局長の自見はなこ議員が厚生労働大臣政務官に就任されました。神奈川の日臨工学会でご講演頂いた加藤勝信議員も厚生労働大臣に返り咲きです。利害関係や既得権益については世間の目は厳しく、結果につなげるハードルは極めて高いですが、全くご縁が無いよりは少しだけ期待が持てると感じます。今回は自見はなこ議員が就任された「大臣政務官」についてお話ししたいと思います。

まずは2001年に行われた中央省庁再編に話は遡ります。中央省庁再編以前は、各大臣の下には「事務次官」と「政務次官」の2つの役職が置かれていました。事務次官は中央省庁の官僚たちのトップに位置し、大臣を事務方として支える役職です。政務次官は大臣を政治の面で支える役割を担い、建て前としては両者の立場は対等でした。ところが当時、政務次官のポストには、当選したての若手議員が政策の勉強のために就くことが大半だったのです。そのため、官僚たちは大臣の言うことは聞くものの、政務次官の言うことは無視するケースも。「いてもいなくても支障がない」という意味で、中央省庁の「盲腸」と揶揄されていました。そこで、2001年の中央省庁再編時に政務次官を撤廃し、副大臣と大臣政務官を新設。大臣の下に副大臣を置き、事務次官よりも高い立場を与えました。大臣政務官に特定分野の政策を担当する議員を起用することで、大臣、副大臣、大臣政務官による「政治家チーム」の強化を図ったわけです。

会社でいえば、大臣が社長なら、副大臣は副社長、大臣政務官は専務といったところでしょうか。副大臣も大臣政務官も省庁に大きな個室をもらって、みんなそこで仕事に励んでいます。そう言えば、自見はなこ議員が最初に立候補されたときに推薦状の任命式を行ったのは、財務省内の大家敏志財務大臣政務官室でした。横倉医師会長も同席され、当時の井福副理事長同伴の元、ガチガチに緊張した場での催しでした。当時を今思い返してもゾッとする思いです。今回の内閣改造では知名度抜群の今井恵理子議員が内閣府政務官に就任したことで、大きな話題となっています。もっぱら、「一回の当選なのにまだ早い」とか、「無役からいきなりで務まるのか」など厳しい意見が多いですが、前述したように、歴史的にも“当選したての若手議員が政策の勉強のために就くことが大半”なようですので、巷で言うほどの批判にはあたらないのかもしれません。（肥田理事長）



北海道会員倍増活動



（※2020年4月導入予定の道臨工支部制地図）

2019年12月1日（日）第30回北海道臨床工学会（札幌）にて、連盟ブースの出展を行いました。私自身、今年10月に都道府県担当を拝命して、初めての本格的な連盟活動でした。北海道においては、残念ながら、連盟の知名度が低く、入会数（率）も伸び悩んでおり、いまひとつ活動が周知されておりませんでした。医師の働き方改革に関わるタスクシフト／シェアや来春の診療報酬改定の議論が進んでおり、臨床工学技士の地位向上、職域拡大が待ったなしの現状において、私的には、このままでは、見向きもされないのではないかと、危機感を強めておりました。立法・行政に訴えるには、連盟の組織率向上が必要というのは、常々、感じておりましたので、まずは目先の入会者増を念頭に、連盟活動を強くアピールできる場を設けたいと思い立ち、ブース出展に踏み切りました。幸いにも、身近に同じような考えを持つ同志が多数おりましたので、一声で同調していただき、順調に準備を進めることができました。また、北海道は広く、普段、技士会活動は地域ごとで行っており、会員同士の面識は地域ごとで限定されていたため、来場者にお声をかけやすいよう、ブース運営のお手伝いを、全道各地で広く募集しました。すると、各地域で先頭に立って技士会活動を支えてくださっている、顔の広いベテランの方々が率先して立候補くださいました。運営に対して、いろんなアイデアも出していただきました。まず、始めるにあたって、連盟・肥田理事長と田村事務局長にご報告し、ブース設営グッズの送荷を打診。すると肥田理事長より、集客のための武器として使いなさいと、連盟”非公式”キャラクター「ダークシープリン」のガムを制作いただきましたので、アンケートを作成し、ご回答頂いた方にのみ、案内パンフレットと共に、これらを一緒に配布することとしました。ブースの設置場所が、学会受付より離れた、人通りの少ない場所であったため、ブースへの人の流れを作るため、会場入口でブースを告知するチラシを配布し、案内を行うこととしました。ここまで順調に準備を整え、当日を迎えました。前日に、北海道臨床工学技士会創設30周年記念の特別講演が行われ、日本臨床工学技士会・本間理事長とともに、肥田理事長が特別講演をされ、連盟活動についてアピールくださっておりましたのも相まって、出足から好調。各地域のベテランの方々が、先頭に立って顔見知りを呼び込んでいただいたおかげで、半日で100名を超える方に起こしいただくことができました。その場で入会手続きができるよう、パソコンやタブレットを用意していたこともあり、当日だけで、30名を超える方にご入会いただきました。

［最終結果］ 前日11/30(土)までの道内会員数：46名 総来場者数：103名

ブース出展後12/1(日)～12/12(木)の新規入会数：52名

（この他に埼玉県からご来場いただいた方にご入会いただいております）

最終的に道内会員数総計で98名と、ブース出展前より倍増しました。多数の方に、連盟活動にご理解・ご協力いただけたことに、心より感謝申し上げます。今後も、ご理解を深めていただき、会員を継続いただけるよう、引き続き意欲的に活動をしていきたいと思います。

（旭川リハビリテーション病院　木村 吉治）

集団と組織の違いを説明できますか？

答えは、集団は人が集まっただけであり、組織は以下の3つの要素を満たす人の集まりであるとのことでした。

＜組織の3要素＞

- 共通の目的をもっていること（組織目的）
- お互いに協力する意思をもっていること（貢献意欲）
- 円滑なコミュニケーションが取れること（情報共有）

これは、チェスターバーナードが提唱している組織の3要素ですが、これらの3つがそろって始めて組織が成立するというのです。もうすこし具体的な例というと、横断歩道をわたっている人は集団なのでしょうか？それとも組織なのでしょうか？横断歩道をわたっている人や、信号待ちで横断歩道の前に並んでいる人たちには、向こう側にわたるという共通の目的があるので、一見組織といえそうですが、目的を果たすために互いに協力したり、コミュニケーションをとらないので、組織ではありません。
では、サッカー・チームはどうでしょうか？相手チームよりもできるだけ多くのゴールをとることを目的としている人たちの集まりであるだけでなく、その目的にむかってお互いに協力して相手からボールを奪ったり、パスをまわしたりするのだから、サッカー・チームは組織といえそうですよね。このように、目的を共有するだけでなく、お互いに協力しあったり、そのためにコミュニケーションをとらないといけない状況でないと、組織にはなりえません。

また、このバーナード定義を逆に解釈してみると、組織の存在意義や必要性も見出せそうです。つまり、目的を共有する必要もなく、だれともコミュニケーションをとる必要もなく、だれかに協力してもらわなくても良いときは、組織は不要ということなのだから、逆に言えば、一人では達成が困難な目的や目標があり、集団で取り組めばより高い付加価値を提供できるときになってはじめて組織が必要になってくるということなのです。高い付加価値を提供するために、貢献する意欲がある人たちが円滑なコミュニケーションを行う集団のことを「組織」と呼ぶのですね。
我々の日本臨床工学技士会では、毎年のように実態調査アンケートを実施していますが、組織の３要素が不足しているのか？回答率は低いです。電話や必死の勧誘により約４割の回答者となっていますが、今後は、組織の３要素を考え、何が足りていないのかを考える必要があるように感じます。
（三井友成広報部長）

働き方改革が目指すもの

働き方改革のポイント

この法律で注視すべきポイントは、以下の通りです。
・年次有給休暇5日/年取得（消化）の義務化（罰則・罰金）
・時間外労働の罰則付き上限規制（罰則・罰金）
・60時間/月超の割増賃金率の引上げ（罰則・罰金）

●タスクシフトが大詰め
タスクシフトの源泉となる働き方改革関連法案は、令和元年である今年の4月からすでに大企業では適応されている法律ですが、中小企業と医師などの特殊な技術を持つ職業には5年間の猶予期間が与えられているため、病院などの医療機関の適応は2024年からとなります。厚労省は医師の労務負担軽減に関するタスクシフトについて、来年の通常国会への提出を目指しており、急ピッチで作業が進められており、技士会もその対応に日々追われている現状です。

なんと罰則・罰金まで設けられた厳しい設定となっています。一見、仕事を減らして休みを増やそう！という見方もできなくはありませんが、一方でもっともっと働いてしっかり稼ぎたいって人も居るかもしれません。そういう意味では一律に労働時間を削減することを、疑問に感じた方もいらっしゃるのではないでしょうか？

●働き方改革の背景、一般的に過重労働の軽減で身体的な負担を軽くすることが目的と思われていますが、それだけではありません。なかなか表に出にくいのですが、実は人口減による国力の衰えを食い止める為です。一言で言ってしまえば少子高齢化がその原因で、単純に長時間労働の負担軽減が目的ではないのです。例えば、近い将来予想される問題として高齢者の家族を抱える世帯の介護問題があげられます。従前通りの勤務時間を遵守することが正社員の条件だとすると、介護との両立は困難となり、やむを得ず離職を迫られる事態が予想されます。これにより大量の現役世代が離職するようなことになると、国民総生産（ＧＤＰ）のが低下することになり、国際競争力も低下してしまいます。さらに、税収の低下にも影響を及ぼし、社会保障の安定を揺るがすことにもなってしまいます。もうひとつ、外国人労働者受け入れの問題があります。勤勉で良く働く日本人は、ひと頃「２４時間働けますか」と揶揄されるほど、働くことが偉いことと評価されてきました。私の認識が誤っていなければ「よく働くね～」は誉め言葉だと思います。一方外国人は、仕事に対して日本人ほど真摯かつ几帳面にとらえる傾向は薄いのではないでしょうか。入国管理法を改正して外国人を受け入れやすくしているのに、当の外国人が日本の働き方になじめず、思ったほど増えていないのだそうです。ここでも元を正せば人口減。女性や高齢者に加え、労働力を外国人にも頼らざるを得ない事情があるのです。

●幸いなことに通信インフラ（ＩｏＴ）や人工知能（ＡＩ）が、同じタイミングで目を見張る台頭を見せています。昨今ＡＩに仕事が奪われると話題になっていますが、少子高齢化による生産年齢人口の減少による労働力不足をこれらのテクノロジーが補う形となって、懸念される国力の低下を補う可能性が出てきました。物資が溢れ利便性が極限まで実現されつつある時代となり、もうお腹いっぱい！と感じる場面もありますが、おそらくこの流れは止めることができないし、乗り遅れると取り残されることになるのだと思います。

●サボるという概念を変革する、自身の職場でも数年前から連続休暇制度が始まりました。複数の職員がいる中で、真っ先に長期休暇制度の使ったのは入職したての一番若い職員でした。先輩や上司は目が点になりましたが、この先輩や上司の感覚自体がひょっとしたら誤りなのかもしれません。そう言えば、皆勤賞なんて言葉もありましたね。若いころひたすら上司や先輩に従順で、年を取り逆の立場になったら、今度は部下にきめ細やかに気を遣う。幸せだなぁー。Mだから…（泣）

実態調査アンケートの意義

日本臨床工学技士の会員を対象に実態調査が実施されています。前回の調査は回収率30.4%と辛うじて会員全体の3割を超える回答が得られました。ただ、言い換えると残りの69.6%からは回答を得られることができておりません。今回の調査では、４１%の回収率でしたが目標である100%には程遠い状況です。近年、職能団体としての啓発が組織強化職能委員会を中心に進められていますが、まだまだ成果が見えるとは言えない状況です。

数年前に連盟で行ったアンケートでは、人事院勧告級別標準職務表に臨床工学技士を明記、他の医療職種との診療報酬乖離是正、国公立大学に養成校の設置、在宅医療への参入とそれに関わる基準と報酬の強化となっており、少ない回答数ではありますが、現状を改善したいという要望が表出されました。ここ数年同様の目標で活動を強化してきましたが、さすがに一朝一夕で進むものではありません。活動を進める中で強く感じることは、右肩上がりの時代とは異なり、少子高齢化社会など社会情勢も加わって厳しい状況が続く中、国家予算の配分を決定する政府やそれを実施する行政は、きちんと国民に説明できる確かな根拠の重みが増しているということです。先方の立場からすれば、それがないと、今の時代あっという間に拡散炎上ということに成りかねません。そういう意味でも厳しい時代となりました。

そのような状況の中でお願いを叶えて貰うにはどうすれば良いでしょうか？まず、「言ってることは本当か？！」ということです。「他の人よりお小遣いが少ない！」と訴えても、交渉が１対１ならすぐ解りますが、〇万人となると話は別です。まず、本当にそうなのか確たる証拠が必要な訳です。さて、100人中30人の情報でそれが本当だと言えるのでしょうか・・・。

要望を実現する為に満たされるべき条件として以下の３点があげられます。

１．効果が期待できる根拠となるデータが揃っていること

２．医療経済的にメリットがあること

３．政策導入の恩恵が一部の人や団体に隔たらないこと。

今、要望を実現したいとき、まずは１．の根拠となるデータが揃っているか？を検討し、そこから次へと展開しなければなりません。現在、日臨工の統計調査委員会とも連携を強化し、根拠となるデータ作りに注力しているところです。交渉する上において材料は必須であり、銃で戦うには銃弾が必須です。戦いに例えるのは適当ではないかもしれませんが、現在十分な実弾が整っているとは言い難い状況だと考えます。皆様の積極的なご協力を心よりお願い致します。

沈没しそうな船から、乗客を海に飛び込ませるために有効な船長の言葉について、乗客の国民性を述べた「沈没船ジョーク」をご存知でしょうか？アメリカ人：「あなたはここでヒーローになれる」、イギリス人：「あなたは紳士だ」、ドイツ人：「飛び込め。それがルールだ」、イタリア人：「後で女性に愛されますよ」、中国人：「魚が海に泳いでますよ」、日本人：「もうみんな飛び込みましたよ」、とアンケートの回収率が低いのは周囲に同調する国民性？がネックなのかもしれません。続けて、韓国人：「日本人はもう飛び込みました」、北朝鮮人：「今が亡命のチャンスです」と続き、最後に関西人：「阪神が優勝しました！」がオチだそうです。（笑）（肥田理事長）

「野田聖子さんのさらなる飛躍を期待する会」参加報告

令和1年12月18日（水）帝国ホテル富士の間において「野田聖子さんのさらなる飛躍を期待する会」が開催され、連盟事務局長　田村守啓さんと参加しました。

今回、わたくしが野田聖子先生のパーティーに参加させて頂くきっかけとなったのは、令和1年11月20日に開催された鹿児島小児在宅ケア・人工呼吸療法研究会での「これからの障害児者医療福祉について」と題した野田先生のご講演を鹿児島臨床工学技士会メンバーと拝聴させて頂き、講演会後の懇親会でご挨拶させて頂いたことでした。ご講演の内容は、医療的ケア児の在宅医療における問題点などについて野田先生の息子様を例に自宅での人工呼吸やリハビリの様子についてお話しされました。わたくしは、ご講演の内容から臨床工学技士の在宅への出番が絶対必要だと強く感じ、そのことについて懇親会でお話しさせて頂きました。その際、野田先生には臨床工学技士という職種の認識は無かったようで「皆様のような方（臨床工学技士）は東京にも居ますか？」でした。

パーティー会場入場時には野田先生が一人ずつ握手をされお声掛けされていて、私の番ではしっかりと覚えていて下さり遠方から参加のねぎらいと臨床工学技士を認識して頂けたとのお声を掛けて頂きました。会場は、平日のお昼にもかかわらず約1,000名収容の富士の間がいっぱいでしたが、田村さんのアドバイスも有りど真ん中の前から2番目のテーブルに陣取り間近で加藤 勝信厚生労働大臣をはじめ小泉 進次郎環境大臣など野田先生と所縁の有るそうそうたる顔ぶれのご挨拶を聞くことができました。野田先生のご挨拶は、「ポスト安倍」として女性初の総裁候補としての出馬意欲を滲ませ大いに盛り上がりました。

野田先生のご挨拶のあとは写真撮影をするべく、やはり田村事務局長の「早い方が印象に残る」とのアドバイスにより料理には目もくれず一目散に並びました。そしてお会いしてのご挨拶では、臨床工学技士について自見はなこ先生から話は聞いたとの事で「わたくしも（臨床工学技士を）応援致します」との嬉しいお言葉を頂き、更に次のお会いする機会を頂けると話の端々にありましたので大いに期待をさせて頂いています。また、会場で鹿児島出身衆議院比例（九州）のみやじ拓馬先生にもご挨拶させて頂きました。みやじ先生は自見はなこ先生とも繋がりがあるとのことで、臨床工学技士の資質向上を求める議員連盟に参加頂けるとのお話を頂きました。

野田先生の「東京にも居るの？」からあらためて臨床工学技士の知名度がまだまだであると痛切に感じたところです。私たち臨床工学技士の「これから」を考え、進めていくには、できることをコツコツは当然として、そして時にはガツガツと取りに行かなければ未来を切り開くことはできないのではないかと思われました、待っているだけでは誰も引き上げてくれません。

（公益社団法人昭和会　今給黎総合病院　齋藤 謙一）